

第1節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 教育総合研究センター改修 I 期工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内J・K-16区

調査面積 約130㎡

調査期間 平成17年6月27日～7月22日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

吉田構内ほぼ中央に位置する共通教育本館西側の改修工事が決定した。工事は現状建物の南北に耐震補強用の外壁と設備配管を新設するものである。共通教育棟は統合移転に伴う発掘調査が行われる以前に建てられたため、建築工事に先立って発掘調査は行われていない。また、その後の調査も少なく、埋蔵文化財の遺存状況は不明な点が多かった。

このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示の下、(発掘調査を要する工事計画として、平成15年3月13日埋蔵文化財資料館運営委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行った。なお、調査にあたっては工事予定地内にA～Fの6ヶ所の調査区を設けて行った。

(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(1-1～2に細分、層厚約5～20cm)

第2層 造成土(2-1～10に細分、層厚約70～130cm)

第3層 旧水田耕土(3-1～4に細分、層厚約10～20cm)

第4層 旧水田床土(4-1～5に細分、層厚約4～20cm)

第5層 遺物包含層もしくは弥生時代以降の遺構面と考えられる層(5-1～7に細分、層厚約15～30cm)

第6層 地山(6-1～6に細分、層厚10cm以上)

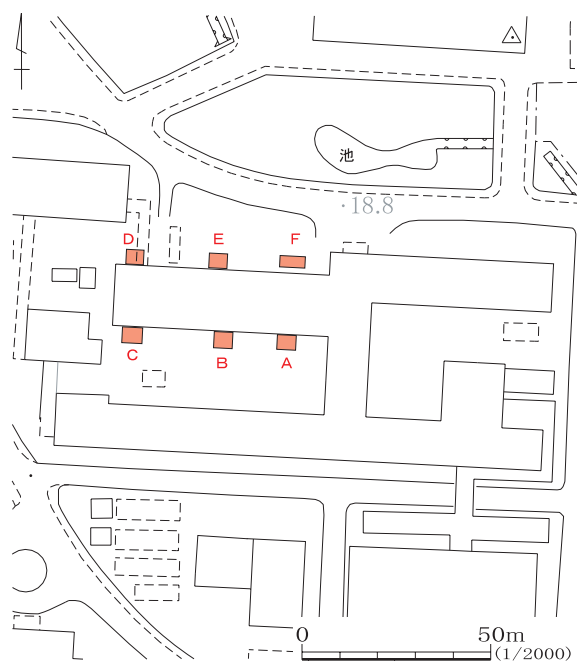


図4 調査区位置図



写真7 A～C調査区調査前全景(南東から)



写真8 D～F調査区調査前全景(東から)

(3)層序・遺構**A調査区**

調査区北半部は污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。また、南半には旧浄化槽があり、大きく攪乱されていた。このため、污水管南側のごく一部でのみ土層が観察できたにすぎず、遺構は皆無であった。なお、調査区は掘削直後から崩落が激しく、污水管も一部破損し実験排水が漏れだしたため、安全上の配慮から土層の実測・写真撮影の後、直ちに埋め戻した。

層序は、層厚約72cmの第1・2層、層厚約20cmの第4-1層：灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土、層厚約20cmの第5-1層：黒褐色(2.5Y3/1)粘質土、層厚約20cm以上の第6-1層：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土の順である。第5-1層は遺物包含層の可能性はあるが遺物は出土しなかった。

B調査区

調査区北半は污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。層序は、層厚約90cmの第1・2層、層厚約20cmの第3-1層：灰色(5Y5/1)粘質土、層厚約8cmの第4-1層：灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土、層厚約15cmの第5-1層：黒褐色(2.5Y3/1)粘質土、層厚約25cm以上の第6-2層：オリーブ色(5Y5/4)粘質土の順である。この調査区では、第3-1層上面から掘りこまれた攪乱土坑、統合移転直前まで使用されていたと考えられる水田暗渠1条を検出した。また、A調査区と同様に第5-1層を検出したが、遺物は出土しなかった。

C調査区

調査区北半は污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。また、調査区の南東部には旧浄化槽により攪乱されていた。層序は、層厚約145cmの第1・2層、層厚約20cmの第4-1層：灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土、層厚約12cmの第5-1層：黒褐色(2.5Y3/1)粘質土、層厚20cm以上の第6-3層：明黄褐色(10YR6/6)粘土の順である。

この調査区では落ち込み2基(SX1・2)と河川1条を検出した。SX1は攪乱のため全形は不明である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘質土の単一層で、深さは約14cmである。北端部を掘削した以外は上面検出にとどめた。遺物は出土していない。SX2は北西側を河川に切られているため、全形は不明である。輪郭がやや不明確であることから、遺構ではない可能性もある。調査区南西端を掘削した以外は上面検出にとどめた。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土の単一層で、深さは約18cmである。遺物は出土していない。河川は北東-南西の流路方向と推測され、調査区内における検出幅は約100cmである。調査区西壁では深さが約70cmで、埋土は3層に分かれる。最下層の暗オリーブ灰色(N3/1)粗砂から土師器小片が出土したほかに出土遺物はなく、時期は不明である。

D調査区

調査区南半は污水管と建物建設時による掘削により攪乱されていた。層序は、層厚約120cmの第1・2層、層厚約10cmの第3-2層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土、層厚約4cmの第4-2層：黄褐色(2.5Y5/4)粘質土、層厚約20cmの第5-2層：褐灰色(10YR5/1)粘質土・5-3層：暗褐色(10YR3/3)粘質土、掘削底面で検出した第6-4層：橙色(7.5YR6/6)粘土の順である。この調査区では第6-4層直上に第5-3層が堆積していた。同層は調査区北端部で厚く堆積していることから落ち込みの埋土である可能性があるが、遺物は出土していない。また第同層上面では溝1条(SD1)、落ち込み1基(SX1)を検出した。SD1の幅は40cm、深さは8cm、埋土は褐灰色(10YR5/1)粗砂である。SX1は深さが15cm以上あり、上面でピット3基(Pit1~3)を検出した。Pit1の直径は32cm、Pit2の直径は8cm、Pit3の直径は12cmで埋土はいずれも5-3と褐灰色(10YR5/1)粗砂のブロック土である。また、北壁沿いの深掘り部分では、第6-4層

上面でピット1基(Pit4)、落ち込み1基(SX2)を検出した。埋土は第5-3層と同一である。ごく一部を検出したにすぎないため、詳細は不明である。また、深掘り部分を除き掘削を行っていないこともあり、遺物は出土しなかった。

E調査区

調査区南半は污水管と建物建設時による掘削により攪乱されていた。層序は、層厚約100cmの第1・2層、層厚約15cmの第3-3層:灰色(10Y4/1)粘質土、層厚約20cmの4-3層:灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土・第4-4層:暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土、層厚約40cmの第5-1層:黒褐色(2.5Y3/1)粘質土、層厚約10cmの第6-5層:にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土、層厚68cm以上の第6-6層:明黄褐色(2.5Y6/6)粘土の順である。

この調査区では、河川1条を検出した。河川は、最下層で黄灰色(5Y5/1)粗砂が堆積しており、流水状況にあったことがうかがえるが、上層は粘質土の堆積が主体であるから谷状の落ち込みを呈していたと考えられる。調査区の東半は検出にとどめ、調査区西半で東西・南北方向で深掘りを行い精査したが、遺物は出土しなかった。河川埋没後の落ち込み部分に堆積したのが、第5-1層である。この層からは摩滅した弥生土器片が少量出土した。

なお、調査区から北へ30mの地点では、平成元年度に水銀灯新宮に伴い発掘調査が実施されており、黄褐色粘土の地山の直上でオリーブ黒色土の遺物包含層が確認されている。また、オリーブ黒色土の直下では5世紀代の土師器を伴う溝状遺構が検出されている。第5-1層は上記の調査で確認された遺物包含層と一連の遺物包含層である可能性があり、調査区周辺では今後ともその分布に注意を払う必要がある。

F調査区

調査区東半は旧浄化槽及び污水管布設による掘削、調査区西端は污水管による掘削による掘削で攪乱されていた。層序は、層厚約80cmの第1・2層、層厚約10cmの第3-4層:暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質土、層厚約8cmの第4-5層:灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土、層厚約15cmの第5-4層:黄灰色(2.5Y4/1)粘質土・5-5層:オリーブ黄色(5Y6/4)粘質土、層厚30cm以上の第6-6層:明黄褐色(2.5Y6/6)粘土の順である。第5-6層からは摩滅した弥生土器片もしくは土師器片が少量出土した。

この調査区では、旧水田暗渠1条、溝1条(SD1)、ピット4基(Pit1~4)、杭跡が検出された。これらの遺構のうち、SD1以外は掘削を行っておらず、遺物も出土していないため時期は不明であるが、埋土の色調から弥生~古墳時代に属する可能性がある。杭跡の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘質土、ピット、溝の埋土は黄灰色(2.5Y4/1)粘質土・黒褐色(2.5Y3/1)粘土に遺構検出層である第6-6層をブロック状に含むものである。Pit1~4の直径は約25cm、Pit5の直径は約35cmである。SD1は幅約20~50cm、深さ約20cmである。弧状に湾曲しており、竪穴住居跡の側溝であった可能性がある。

(4)遺物

今回の調査で出土した遺物は全て小片で、図化できたのは以下の2点にとどまった。1、2はE調査区第5-1層から出土した弥生土器甕底部片で、弥生時代中~後期に属するものと考えられる。いずれも風化が激しく調整は不明である。調査区北側の丘陵部から流れ込んだものであろう。

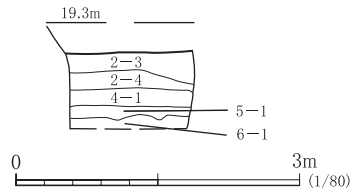


図5 A調査区北壁土層断面図

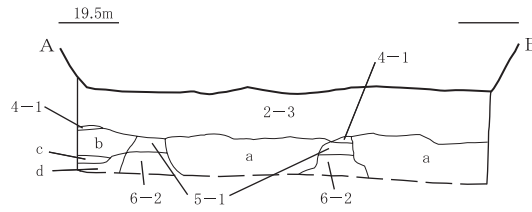


図6 B調査区平面図・断面図

遺構埋土

- a 灰色 (10Y4/1) シルトと
3・4のブロック土
- b 灰オリーブ色 (5Y4/1) 粗砂
- c 黒色 (5Y2/1) 粘質土
- d 灰オリーブ色 (5Y4/1) 砂質土
- e 灰色 (N4/0) シルト
- f 暗灰色 (N3/0) シルト
- g 暗オリーブ灰色 (N3/1) 粗砂
(0.5 cm大の礫を含む)
- h にぶい黄褐色 (10YR5/4)
粘質土

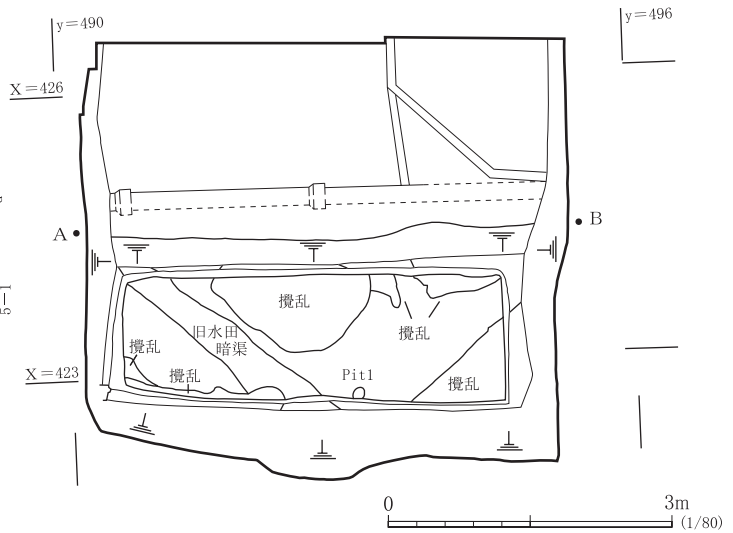
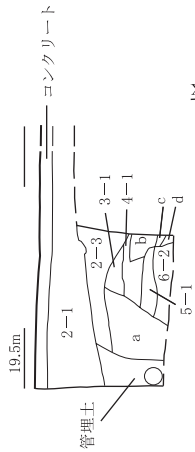


図7 C調査区平面図・断面図

- 1-1 表土 腐植土 (マサ土)
- 1-2 アスファルト
- 2-1 造成土 マサ土
- 2-2 造成土 パラス
- 2-3 造成土 パラス・3・4、
青灰色 (5B6/1) 粘土ブロックを含む
- 2-4 3-1・4-1のブロック土
- 3-1 旧水田耕土 灰色 (5Y5/1) 粘質土
- 4-1 旧水田床土 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土
- 5-1 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
- 6-1 地山 オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘土
- 6-2 地山 オリーブ色 (5Y5/4) 粘土
- 6-3 地山 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土

吉田構内(吉田遺跡)の調査

- 1-1 表土 腐植土(マサ土)
- 1-2 表土 アスファルト
- 2-1 造成土 マサ土
- 2-2 造成土 バラス土
- 2-5 造成土 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土・橙色(5YR6/6)粘質土
- 2-6 造成土 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土に6-4をブロック状に含む
- 2-7 造成土 灰オリーブ色(7.5Y5/2)土マサ土を含む
- 2-8 造成土 灰オリーブ色(7.5Y5/2)土に、灰色(7.5Y4/1)、6-5、6-6をブロック状に含む
- 3-2 旧水田耕土 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土
- 3-3 旧水田耕土 灰色(10Y4/1)粘質土
- 4-2 旧水田床土 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
- 4-3 旧水田床土 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
- 4-4 旧水田床土 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
- 5-1 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土
- 5-2 褐灰色(10YR5/1)粘質土
- 5-3 暗褐色(10YR3/3)粘質土
- 6-1 地山 オリーブ黄色(5Y6/3)粘土
- 6-2 地山 オリーブ色(5Y5/4)粘土
- 6-3 地山 明黄褐色(10YR6/6)粘土
- 6-4 地山 橙色(7.5YR6/6)粘土
- 6-5 地山 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土
- 6-6 地山 明黄褐色(2.5Y6/6)粘土

遺構埋土

- i 褐灰色(10YR5/1)粗砂
1cm大の礫を含む
- j 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
- k 黒褐色(10YR3/1)粘質土
- l 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
- m 灰色(7.5Y4/1)粘質土
- n オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土
- o 黄灰色(5Y4/1)粘質土
- p 黄灰色(5Y5/1)粗砂

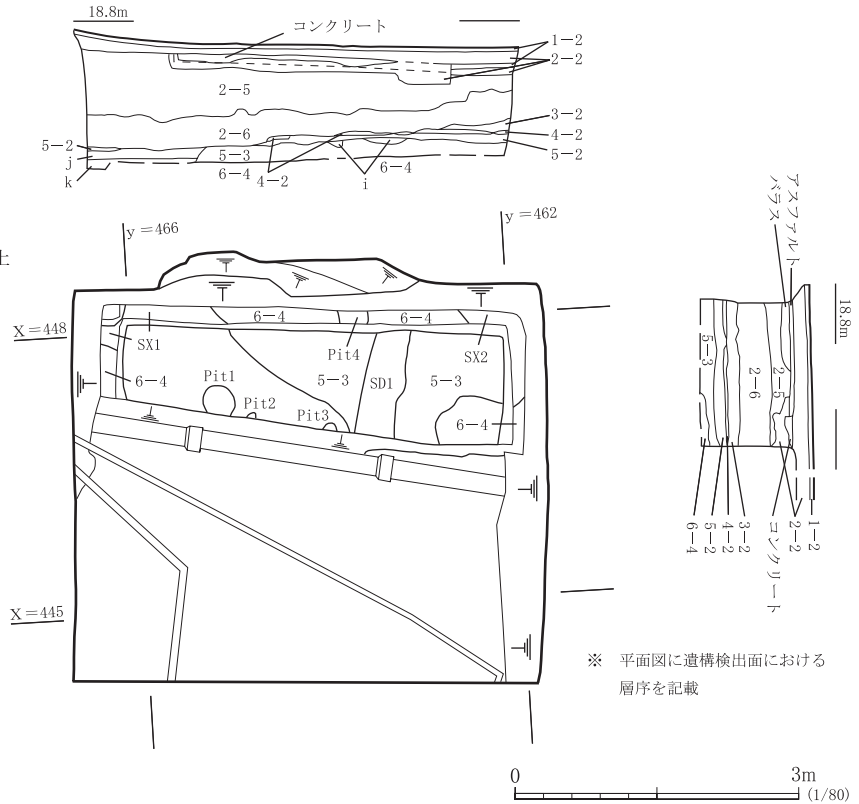


図8 D調査区平面図・断面図

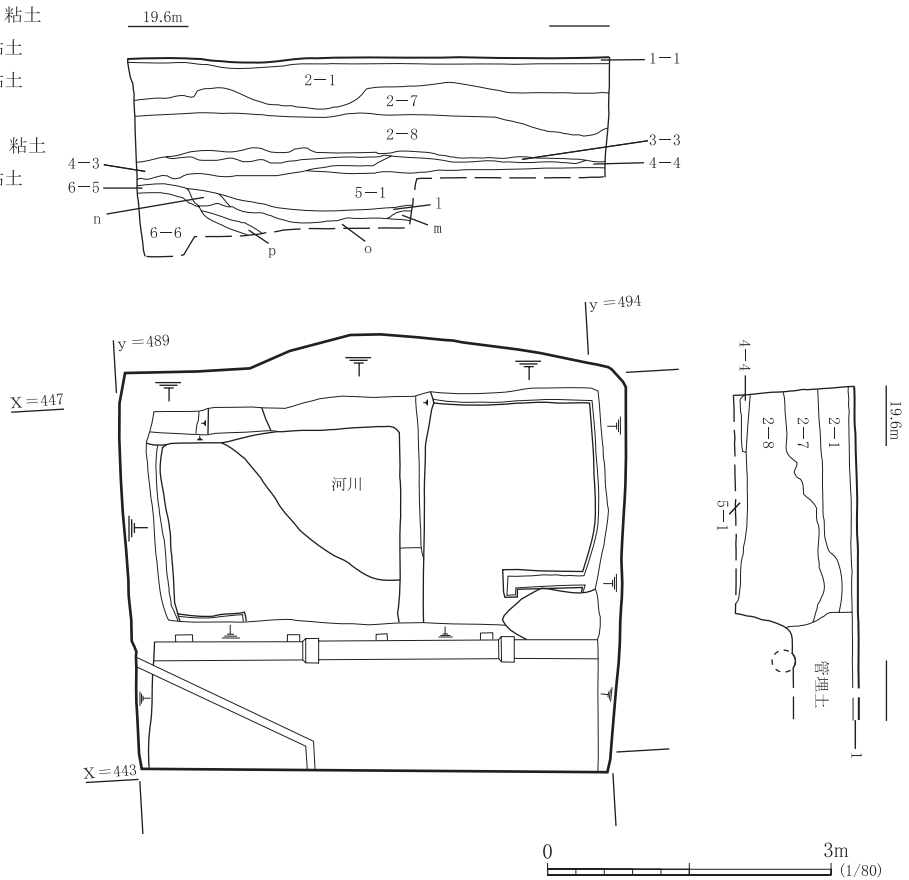


図9 E調査区平面図・断面図

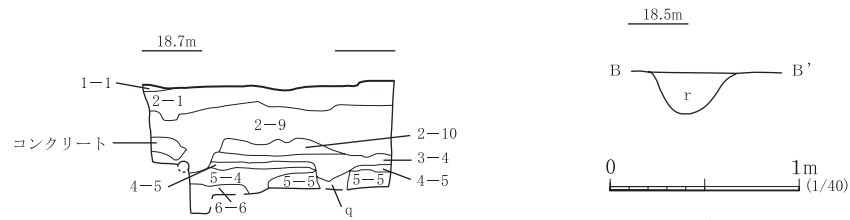


図 11 F調査区SD1 断面図

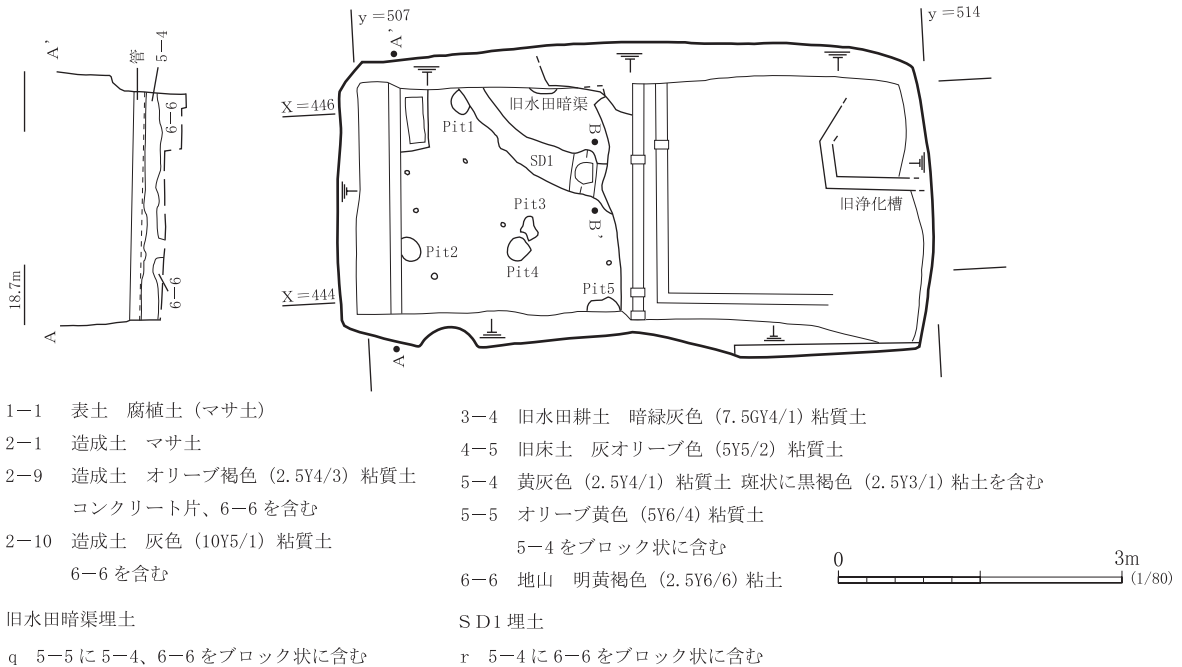


図 10 F調査区平面図・断面図

(5) 小結

今回の予備発掘調査の結果、改修建物の南側に設定したA～C調査区では攪乱が激しく、C調査区西端で河川を検出するにとどまった。しかし、改修建物の北側に設定したD～F調査区では河川や溝・ピット等の遺構を検出し、E調査区では遺物包含層から弥生土器片が出土した。これにより、改修建物北側における埋蔵文化財の保護が課題となった。調査結果を踏まえて、埋蔵文化財資料館専門委員会が埋蔵文化財の保護について協議を行った結果、矢板工法により掘削幅を極力狭くすれば、検出された遺構が保護され、埋蔵文化財の破壊が最小限にとどまることが判明した。そこで、改修建物の北側における掘削工事は矢板工法で行い、工事掘削の際に立会調査を実施することにより埋蔵文化財の記録保存を行うことになった。

今回の調査によって、これまで状況が不明確であった吉田構内中心部における埋蔵文化財の存在が明らかとなった。今後の調査によって、さらに詳しく埋蔵文化財の分布を明らかにしていく必要がある。

[註]

1) 河村吉行(1991)「第2章 吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』, 山口



写真9 A調査区全景 (西から)



写真10 A調査区北壁土層断面 (南から)



写真11 B調査区南部遺構検出状況 (東から)



写真12 C調査区南部遺構検出状況 (東から)



写真13 D調査区全景 (西から)



写真14 D調査区北壁土層断面 (南西から)



写真15 E調査区全景 (西から)



写真16 E調査区北壁・西壁土層断面 (東から)



写真17 F調査区遺構検出状況(南西から)



写真18 F調査区北壁・西壁土層断面(南東から)

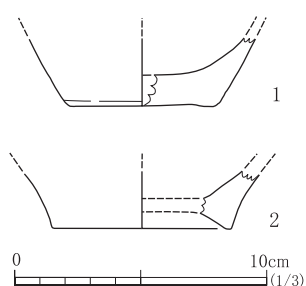


図12 出土遺物実測図

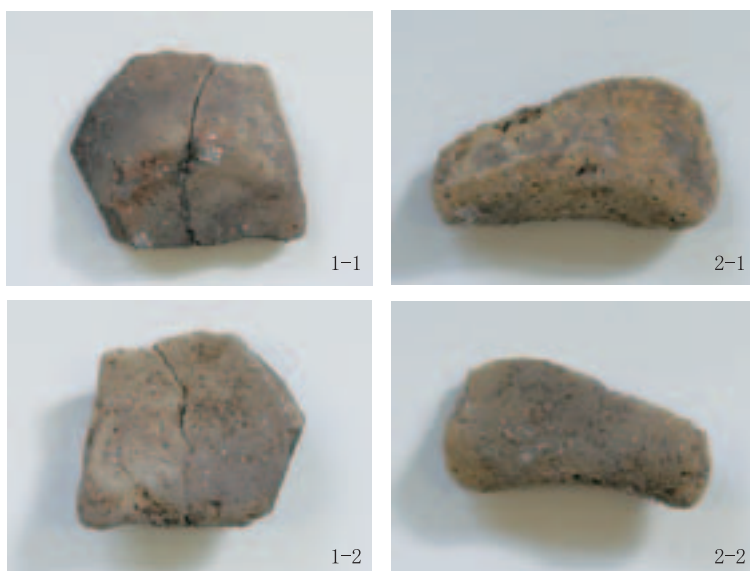


写真19 出土遺物

表2 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
					①口径	②底径③器高	①外面	②内面		
1	E	5-1	弥生土器 甕	底部		②(5.8)	①灰オリーブ色(5Y6/2) ②灰白色(5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む		
2	E	5-1	弥生土器 甕	底部		②(7.2)	①浅黄色(2.5Y7/4) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1~4mmの砂粒を 多く含む		

2. 教育総合研究センター改修 I 期工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内I・J・K-16区、H-12区、
E-20区

調査面積 約580㎡

調査期間 平成17年7月12、8月22、9月8、12～14、10月25、28、12月20、22、26～28、1月5～6、10、16～19、23、25、26、2月3、8、9日

調査担当 田畑直彦

調査結果 教育総合研究センター改修 I 期工事に伴い、立会調査を実施することとなった。調査は改修建物周辺(調査区位置図①)のほか、工事に伴う仮設電力引き込み設置に伴い、サッカー・ラグビー場(調査区位置図②)、電気設備改修工事に伴い、正門の守衛所南側(調査区位置図③)でも工事が行われた。これらの調査区は広範囲に分散しているため、以下では、1～8区に分けて報告を行う。

1・2区は外壁新設工事に伴う調査区で、1区は幅約5m、長さ約50mの範囲、2区は幅約2.7m、長さ約50mの範囲を、いずれも現地表下から約150～200cmまで掘削を行うもので、建物外壁から外側約1.9mまでは掘削底面まで攪乱されていた。3区は排水管と雨水桝新設工事に伴う調査区である。幅1.4m、延長約100mを、最深部で現地表下約170cmまで掘削を行うものであった。

1区では、1A地点の南壁、現地表下約110cmで幅約2m、深さ約30cm、埋土が暗緑灰色(10G3/1)粘土の単一層である遺構の一部を確認した。また、1B地点では、現地表下約150cmで、予備発掘調査時に検出した河川の延長部分を検出した。河川は調査区壁面で幅約2.1m、深さは44cm以上である。いずれも遺物は出土しなかった。

2、3区は近接しているため、合わせて東側から報告する。3A地点では、現地表下約100～80cm、造成土直下で黒褐色(10YR3/1)粘質土を検出し、弥生土器・土師器小片が少量出土した。若干色調は異なるが、この層は予備発掘調査E調査区で検出された黒褐色粘質土と同一層であると考えられる。2A地点では、現地表下約125cm、層厚約30cmの黒褐色粘質土の直下で土坑を検出した。86cm×25cm以上の規模で、深さは約13cm、埋土は黒色(10YR2/1)粘

土直下で黒褐色(10YR3/1)粘質土を検出し、弥生土器・土師器小片が少量出土した。若干色調は異なるが、この層は予備発掘調査E調査区で検出された黒褐色粘質土と同一層であると考えられる。2A地点では、現地表下約125cm、層厚約30cmの黒褐色粘質土の直下で土坑を検出した。86cm×25cm以上の規模で、深さは約13cm、埋土は黒色(10YR2/1)粘

土直下で黒褐色(10YR3/1)粘質土を検出し、弥生土器・土師器小片が少量出土した。若干色調は異なるが、この層は予備発掘調査E調査区で検出された黒褐色粘質土と同一層であると考えられる。2A地点では、現地表下約125cm、層厚約30cmの黒褐色粘質土の直下で土坑を検出した。86cm×25cm以上の規模で、深さは約13cm、埋土は黒色(10YR2/1)粘

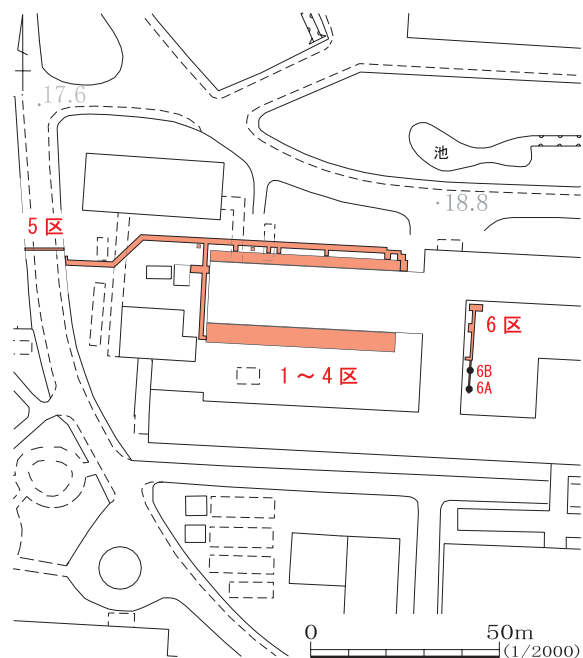


図13 調査区位置図①

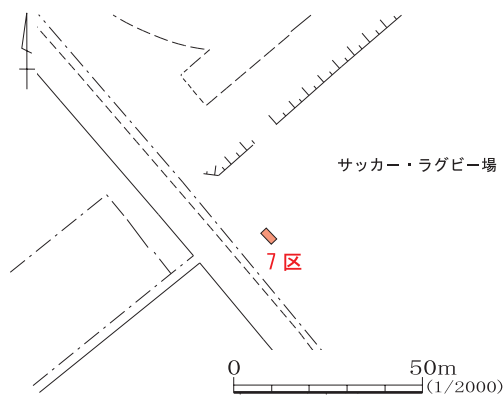


図14 調査区位置図②



図15 調査区位置図③

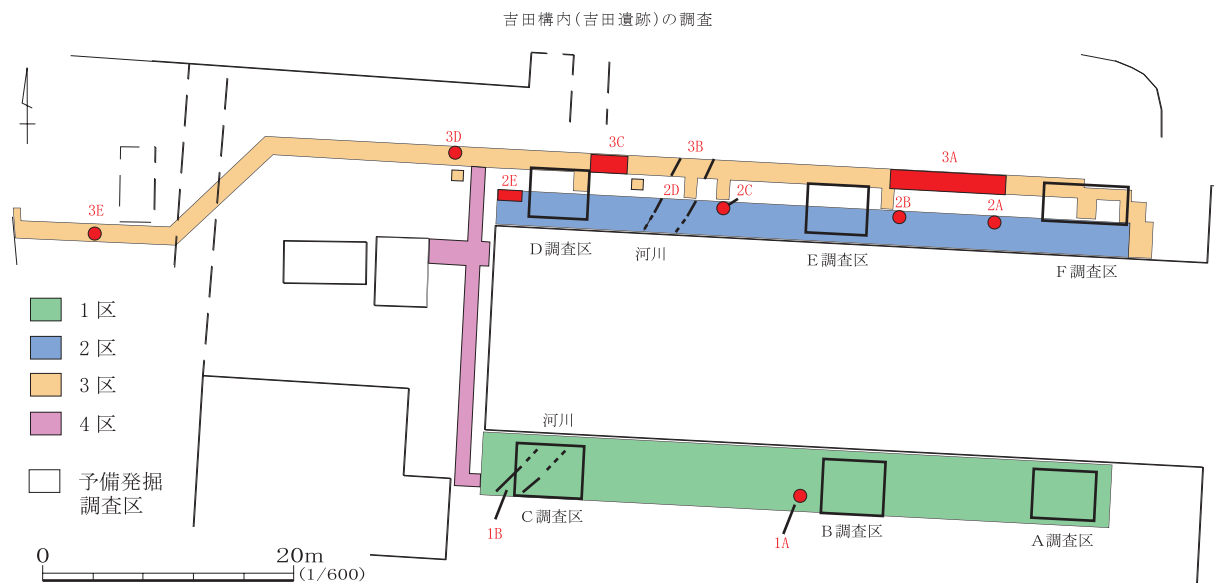


図 16 詳細位置図

質土の単一層である。遺物は出土しなかった。2B地点北壁では、現地表下約130cm、層厚約30cmの黒褐色粘質土の直下で幅約50cm、深さ約20cm、埋土は黒褐色(10YR3/1)粘質土の単一層である遺構の一部を検出した。2C地点北壁では現地表下約110cmで、幅約170cm、深さ50cm以上、埋土がオリーブ黒色粗砂である溝の一部を検出した。遺物は出土していない。2D、3B地点では、河川を検出した。2D地点北壁では、現地表下約90cmで河川上面を検出し、幅約2.5m、深さ50cm以上であることを確認した。埋土は、現地表下約90～113cmが灰黄褐色(10YR4/2)シルト、113～145cmが灰色(7.5Y4/1)粗砂、掘削底面が灰色(N4/0)粘質土と明黄褐色(5YR5/6)粗砂とのブロック土であった。流路方向は北東－南西であり、1B地点で検出された河川と同一の可能性はある。検出時に弥生土器、土師器、須恵器小片が少量出土した。3C地点東側では、現地表下117cmで、直径約22cmのピットを検出した。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルトと明黄褐色(10YR6/6)粘土のブロック土である。掘削は行っていない。同地点西側では現地表下107cmで幅・長さ40cm以上の遺構の一部を検出した。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトである。いずれも遺物は出土していない。2E地点北・西壁では、直径、深さが約10cmのピットを3基検出した。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘質土である。遺物は出土していない。

3D地点は現地表下約122cmまでが造成土で、掘削底面で黒褐色(10YR3/1)シルト、灰黄褐色(10YR4/2)粘質土を検出した。攪乱が激しいため断定できないがこれらは遺構の一部である可能性がある。3E地点は現地表下約105cmまでが造成土、105～115cmが旧水田耕土・床土、115～133cmが灰オリーブ色(5Y6/2)シルトであった。この地点では、灰オリーブ色シルト上面で幅40cm、長さ170cm以上の遺構の一部を検出した。埋土は灰色(5Y4/1)シルトと灰オリーブ色(5Y6/2)シルトとのブロック土である。3D～3E地点間では現地表下約120～130cmで灰色系シルトを検出している。遺物は出土していないが、遺物包含層の可能性はある。

なお、3A地点から東側では、掘削が現地表下100cm以下にとどまったため、旧水田耕土及び造成土の範囲内であった。また3区のうち予備発掘調査区に重複する部分では、掘削が遺構面に及ぶことなく埋蔵文化財に支障はなかった。

4区は排水管・給水管・ガス管新設工事に伴う調査区である。幅1m、長さ約25mの範囲を最深部で現地表下約150cmまで掘削を行うものであった。調査の結果、攪乱が激しく、調査区北部の一部において現地表下約120cmで旧水田耕土を確認したのみで、埋蔵文化財に支障はなかった。

5区は、建物東側の仮設電力引き込み工事に伴う調査区である。工事は幅約0.6m、長さ約10mの範囲を現地表下約50cmまで掘削を行うものであった。調査の結果、すべて造成土の範囲内で埋蔵文化財に支障はなかった。

6区は、建物東側の設備配管新設に伴う工事に伴う調査区である。工事は、幅0.3～1.8m、長さ約20mの範囲を平均で現地表下から80cm、一部の地点で140cmまで掘削を行うものであった。大半は造成土の範囲内であったが、6A地点では現地表下85cm、6B地点では現地表下55cmで、明黄褐色(2.5Y7/6)粘土の地山を検出した。

7区は、サッカー・ラグビー場の仮設電力引き込み工事に伴う調査区である。工事は、支線の基礎を埋設するため、1.2m×2mの範囲を現地表下から約102cmまで掘削を行うものであった。層序は現地表下57cmまでが表土・造成土、57～72cmが旧水田耕作土であるオリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト、72～87cmが旧水田床土であるオリーブ灰色(7.5Y6/3)シルトであった。さらにその直下、現地表下87～105cmで灰色(7.5Y4/1)シルトを確認した。同層から遺物は出土しなかったが、遺物包含層の可能性が高い。

8区は、正門の守衛所南側で行われた電気設備改修工事に伴う調査区である。工事は幅約0.4m、延長10mの範囲を最大で現地表下約80cmまで掘削するものであったが、全て造成土の範囲内で、埋蔵文化財に支障はなかった。

以上の調査の結果、1～3区で埋蔵文化財が確認された。特に2、3区では、ピットや河川等を検出し、弥生土器、土師器、須恵器片等が出土した。1、4区では攪乱が激しいため、予備発掘調査の所見通り埋蔵文化財はあまり確認されなかったが、1、4区周辺においても、攪乱されていない場所であれば埋蔵文化財が遺存している可能性が高いと推測され、掘削工事の際には慎重な対応が必要である。

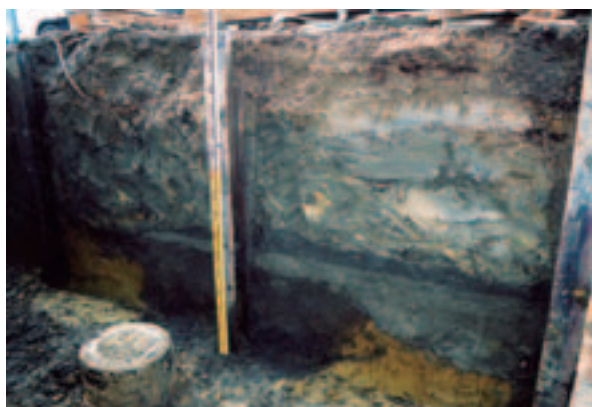


写真20 2C地点北壁土層断面(南東から)



写真21 2D地点河川検出状況(南西から)



写真22 3A地点南壁土層断面(北東から)

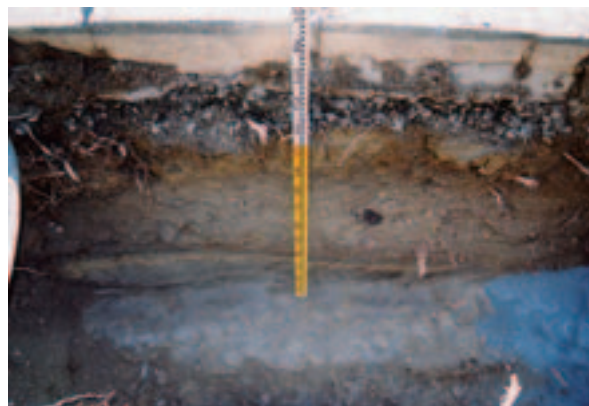


写真23 3E地点南壁土層断面(北から)

3. 日本ペドロロジー学会水田土壌の断面調査に伴う立会調査



図17 調査区位置図



写真24 水田土壌調査風景 (西から)

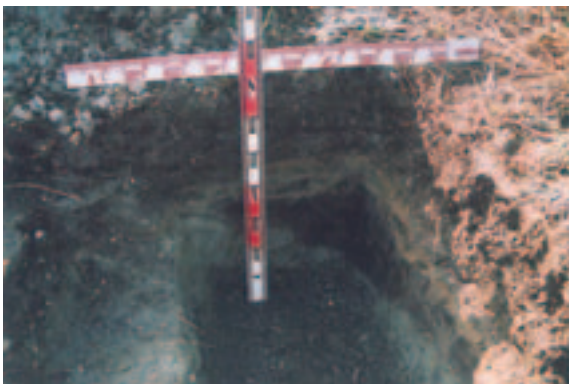


写真25 調査区土層断面 (南東から)

調査地区 吉田構内R-16区

調査面積 約3.1㎡

調査期間 平成17年9月23、24日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内の東部に位置する農学部附属農場実習水田にて、日本ペドロロジー学会により開催された第15回ペドロジスト・トレーニングコースによる水田土壌の断面調査が計画されたことを受けて、立会調査を実施した。

調査による掘削は、実験水田4号田ほぼ中央において、1.4m×2.2mの範囲を最深部で現地地表下から約70cmまで掘り下げるものであった。

調査の結果、現地地表下約22cmまでが現在の耕土・床土、32cmまでが統合移転前の耕土と考えられるオリブ灰色(2.5Y4/3)粘質土であった。以下、現地地表下32～54cmで地山と考えられるオリブ灰色(2.5GY4/1)シルト、54～70cmでオリブ灰色(2.5GY4/1)粗砂、底面の一部で黄褐色(2.5Y5/4)礫を検出した。また、オリブ灰色シルトを検出面とする河川もしくは溝と考えられる遺構の一部を検出した。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)粘質土の単一層で、層厚は最大で約25cmである。遺物は出土しなかった。

調査地の西側に位置する5号田では、平成9年度に実施されたバイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査で古代の河川が検出されている^{註1}。また、1～5号田では多数の土器が採集されていることから、今後とも調査地周辺では埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

[註]

1) 田畑直彦(2004)「第6章第1節2 農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口

2) 田畑直彦(2004)「付篇II 吉田構内農学部附属農場の分布調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口

4. 基幹環境整備(外灯取設)に伴う立会調査

調査地区 吉田構内H-17区、H-22・23区

調査面積 7.7㎡

調査期間 平成17年12月5・8日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内において外灯の新設工事が計画されたことを受け、立会調査を実施した。外灯取設計画地点は、構内南端部に位置する野球場とサークル棟の間の2ヶ所(A・B地点)と音楽練習棟西側の1ヶ所(C地点)であり、外灯基礎設置のためにはそれぞれ1.6m四方の範囲で深度1.4mの掘削が必要とされた。計画地の内A・B地点は、近接地において弥生時代を中心とした遺構・遺物が顕著に確認されていること^{註1}から、工事による埋蔵文化財の破壊が危惧されたため、工事担当者の協力の下慎重に掘削を行った。

調査により確認した層序は、A地点では現地表面より①表土～45cm、②造成土～53cm、③旧耕土(灰色粘質土)～5cm、④旧床土(黄橙色粘質土)～9cm、⑤灰褐色粘質土～5cm、⑥黄褐色強粘土～26cm、⑦明黄褐色粘質土(地山)である。B地点の層序は①表土～30cm、②造成土～28cm、③旧耕土～6cm、④旧床土～6cm、⑤灰色粘性砂質土～11cm、⑥明黄褐色粘質土(地山)である。調査範囲が限定されているため、本調査では埋蔵文化財の遺存は確認されなかったが、両調査地点の現地表下に安定した地山面が確認されたことは大きな成果と言える。当館の過去の調査により、調査地点の北に近接するサッカー場周辺では遺物を密に含む旧河川跡が検出されており、低湿地帯であったことが明らかとなっている。そのため、調査地周辺が微高地であれば集落が形成されている可能性が極めて高いと考えられる。一方C地点は、現地表面より①表土～60cm、②造成土～90cm以上であり、埋蔵文化財に支障のある工事とはならなかった。

[註]

1) 小野忠熙(1976)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』,
小野忠熙(編), 山口

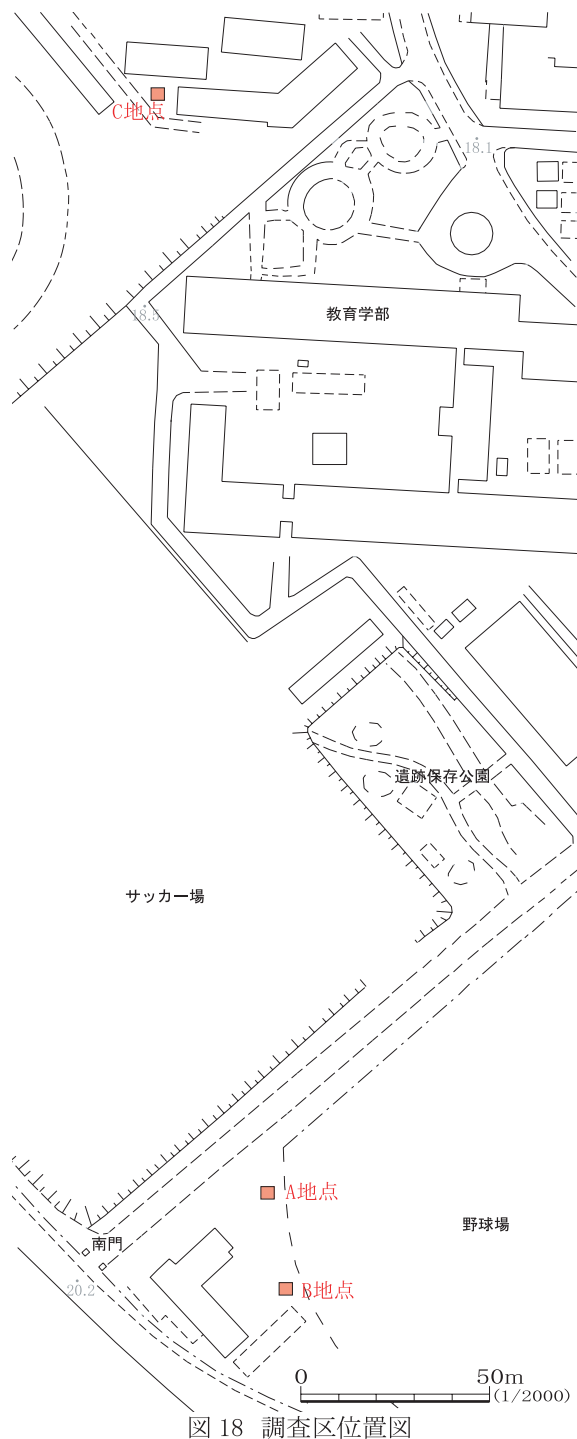


写真26 B地点土層断面(東から)

5. 教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査

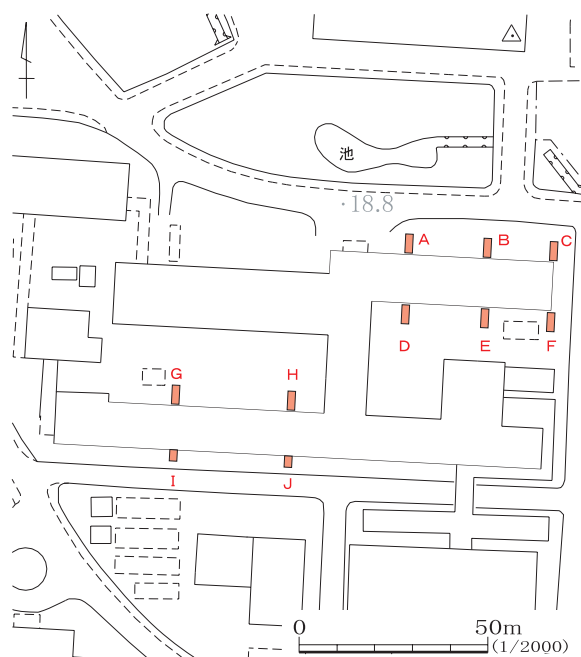


図 19 調査区位置図

調査地区 吉田構内K・L-16、J-16、17、K-17区

調査面積 約92m²

調査期間 平成18年3月27日～4月28日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経過(図19、写真27・28)

前項で報告した教育総合研究センター改修Ⅰ期工事に引き続き、Ⅱ期改修工事が行われることが決定したことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成18年1月30日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認)、工事予定地の予備発掘調査を実施することとなった。今回対象となるのは、Ⅰ期工事で改修が終了した共通教育本館西側部分を除く共通教育本館東側と南に連なる共通教育講義棟である。

工事はⅠ期工事と同様に、現状建物の南北に耐震補強用の外壁と設備配管を新設するものである。ただし、外壁は共通教育本館西側では、北壁の大半と南壁の中央部のみの新設であり、共通教育講義棟では東端部を除いた南壁にのみ新設されることとなった。なお、今回の工事予定地においても、Ⅰ期工事同様、これまでに調査が実施されていないため、工事予定地内にA～Jの10ヶ所の調査区を設けて予備発掘調査を行った。

(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。A～F調査区では第3層は残存していない。またA～F調査区とG～J調査区は堆積状況がやや異なるため、各層の細分は両者で分けて記載した。

第1層 表土(層厚約4～60cm)

第2層 造成土(層厚約25～120cm)

第3層 旧水田耕土(層厚約4～12cm)

第4層 旧水田床土(層厚約2～15cm)

第5層 遺物包含層もしくは弥生時代以降の遺構面と考えられる層(層厚約8～40cm)

第6層 地山(層厚8～50cm以上)



写真 27 A～C調査区調査前全景(東から)



写真 28 D～F調査区調査前全景(東から)

(3)層序・遺構

A調査区

A～C調査区の北半部は共同溝による掘削で攪乱されており、南半部は污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。このため攪乱されていないのは、両者の攪乱の間、南北幅約60cmであった。

A調査区の層序は、層厚約60cmの第1・2層、層厚約12cmの第4-1層:オリーブ灰色(5Y6/3)シルト、層厚88cm以上の河川埋土の順である。河川埋土からは、下層の灰色・灰黄褐色・黄灰色粗砂を中心に弥生土器・土師器片が多数と縄文時代の打製石斧が1点出土した。

B調査区

層序は、層厚約95cmの第1層・共同溝埋土、層厚50cm以上の河川埋土の順である。河川埋土からは弥生土器・土師器片が多数出土し、特に黒色(N2/0)粘土からは、底部を欠く1個体の土師器甕が出土した。

C調査区

層序は、層厚約90cmの第1層・共同溝埋土、層厚60cm以上の河川埋土の順である。この調査区では、排水管が深く埋設されていたため、土層が観察できたのは、東壁・西壁のみであった。

河川埋土からは、黄灰色(2.5Y5/1)粗砂から弥生土器甕底部片が1点出土するにとどまったが、調査区南部では河川埋土を含むと見られる第2-1層から、弥生土器・土師器片が多数出土した。

D調査区

D～F調査区の北半部は污水管と建物建設時による掘削で攪乱されていた。

D調査区の層序は、層厚約70cmの第1・2層、層厚約15cmの第4-2層:にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト、層厚約10cmの第5-1層:黒褐色(10YR3/1)シルト、層厚50cm以上の第6-1層緑灰色(7.5GY6/1)シルトの順である。この調査区では、第4-2層上面で旧水田暗渠1条、第5-1層上面で河川1条、第6-1層上面で落ち込み1基(SX1)と杭跡を検出した。

河川は南側の肩部を検出したが、北側は攪乱されているため幅は不明である。南東から北西方向に流れていたと推測され、深さは65cmである。下層には灰色(7.5Y4/1)粗砂が多く堆積する。埋土からは下層を中心に弥生土器～土師器片多数と須恵器坏蓋片が1点出土した。また、河床からは自然木が出土した。

SX1は掘削を行っていないが埋土が第5-1層と同一であり、同層は北から南、東から西へ緩やかに傾斜して堆積していることから、第5-1層が旧地形の落ち込み部分に堆積したもので遺構ではない可能性がある。遺物が出土していないため時期は不明である。杭跡は4基検出した。埋土は第5-1層と同一であるが、どの層から打ち込まれたものか確認できなかった。

E調査区

この調査区では南半部にも排水管があり、攪乱が著しかった。層序は、層厚約80cmの第1・2層と層厚約4cmで調査区北部の一部にのみ残存する第4-3層:オリーブ黄色(2.5Y6/4)シルト、層厚約12cmの第5-2層:黄灰色(2.5Y4/1)シルト、層厚約15cmの第6-2層:黄褐色(2.5Y5/3)シルト、層厚10cm以上の第6-3層:灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルトの順である。第5-1層からは弥生土器・土師器片が少量出土した。また、調査区南西隅では第6-2層上面で、落ち込み1基(SX1)を検出した。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルトで、周囲の大半が攪乱されている。掘削を行っていないため、詳細は不明である。

- 1 表土 (マサ土)
- 2-1 造成土
 - 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
 - マサ土、4-1、河川埋土を含む
- 4-1 旧水田床土
 - オリーブ灰色 (5Y6/3) シルト
- 河川埋土
 - a 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト
 - b 褐灰色 (10YR4/1) シルト
 - c 黒褐色 (10YR3/1) シルト
 - d 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
 - e 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂
0.5 ~ 1 cm大の礫含む
 - f 灰黄褐色 (2.5Y6/2) 粗砂
0.5 ~ 3 cm大の礫含む
 - g 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
 - h dと緑灰色 (7.5GY4/1) シルト
のブロック土
 - i 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂
 - j 黒色 (N2/0) 粘土
 - k 緑灰色 (7.5GY7/1) シルト
にjをブロック状に含む
 - l 緑灰色 (10G6/1) シルト
 - m 暗灰色 (N3/0) シルト
 - n 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂
0.5 ~ 2 cm大の礫を含む

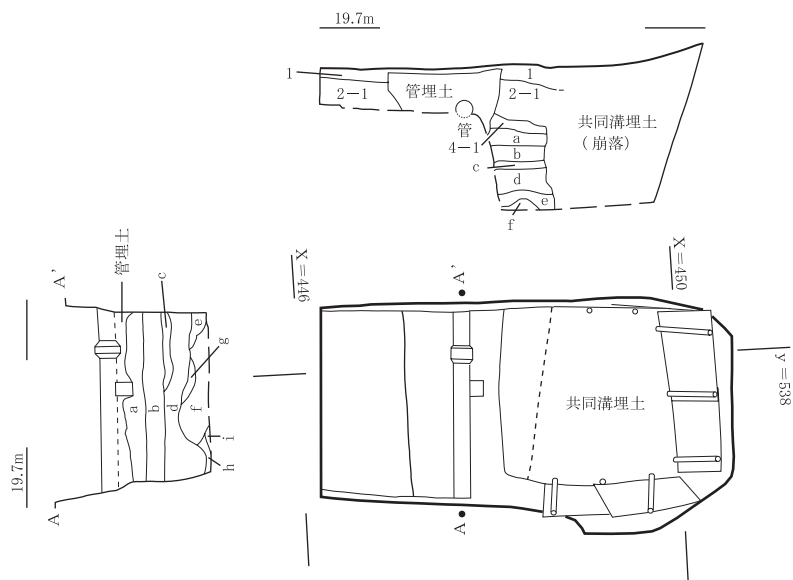


図 20 A 調査区平面図・断面図

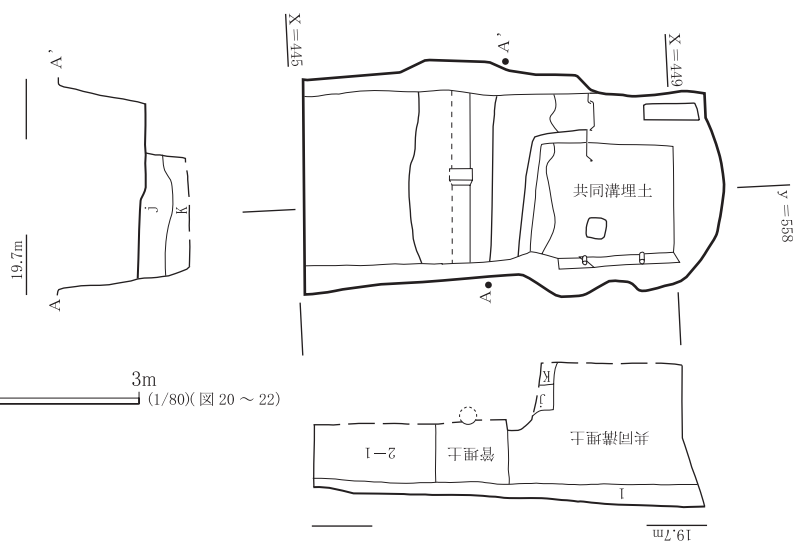


図 21 B 調査区平面図・断面図

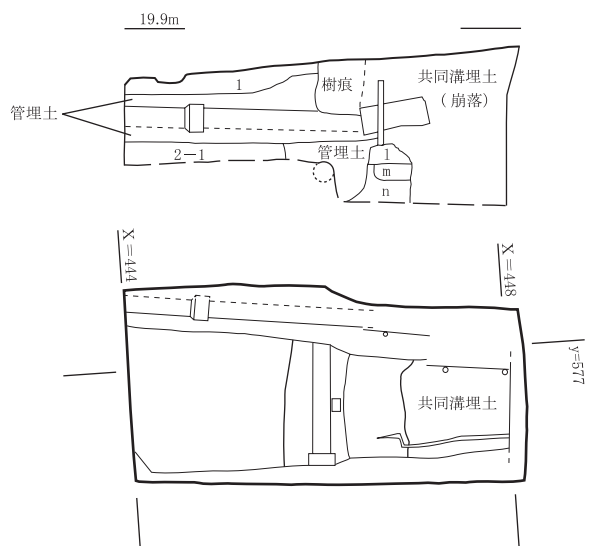


図 22 C 調査区平面図・断面図

F調査区

層序は、層厚約25cmの第1層、層厚約15cmの第5-1層:黒褐色(10YR3/1)シルト、層厚40cm以上の第6-4層:オリーブ黄色(5Y6/3)シルトの順である。調査区南端では現地地表下わずか25cmで第6-4層が検出され、同層上面でピット2基(Pit1、2)、落ち込み1基(SX1)を検出した。Pit1は直径32cm、深さ45cm、Pit2は直径15cm、深さ6cm、埋土は第5-1層と同一である。SX1は攪乱のため規模は不明。深さは8cmである。上層は黒褐色(10YR3/1)シルトで部分的に堆積し、下層は上層と第6-4層とのブロック土である。いずれも埋土の色調から古代以前の遺構と推測されるが、遺物は出土しなかった。

G調査区

G、H調査区は南半部が污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。

G調査区の層序は、層厚約160cmの第1・2層、層厚約12cmの第3-1層:灰色(7.5Y4/1)シルト、層厚約20cmの第4-2層:灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト、層厚45cm以上の第6-1層:明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土の順である。この調査区では、第6-1層上面で落ち込み2基(SX1・2)、溝1条(SD1)を検出した。SX1は統合移転直前まで機能していた水田に関わる遺構と考えられる。SX2はSX1と排水管により攪乱を受けているため、ごく一部の検出にとどまった。埋土は暗灰色(N3/0)シルトと第6-1層とのブロック土で、深さは約2cmである。埋土がSD1と近似すること位置関係からSD1の延長部分の可能性はある。

SD1は北肩部分を検出したが、南半分は建物建設時により攪乱されているため、幅は不明である。検出面からの深さは45cmで、埋土は粘土・粗砂・シルトの互層であり、流水状況にあったことがうかがえる。埋土からは中層～下層を中心に弥生土器片が多数出土した。器形が判別できるものはすべて弥生時代中期後半の土器であり、当該期の遺構と考えられる。

H調査区

層序は、層厚約120cmの第1・2層、層厚約12cmの第5-2層:黒褐色(10YR3/1)シルト、層厚8cm以上の第6-2層:浅黄色(2.5Y7/4)粘質土の順である。この調査区では、第6-2層上面で、旧水田暗渠1条と落ち込み1基(SX1)を検出した。SX1の埋土は第5-2層と同一であり、深さ4cmにとどまることから、同層が旧地形の落ち込み部分に堆積したもので、遺構ではない可能性がある。この調査区から遺物は出土しなかった。

I調査区

I、J調査区は北半部が污水管と建物建設時による掘削によって攪乱されていた。

I調査区の層序は、層厚約90cmの第1・2層、層厚約4cmの第4-1層:オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト、層厚約30cmの第5-1～4層、層厚8cm以上の第6-3層:明黄褐色(10YR7/6)シルトの順である。第5-1～4層は色調から遺物包含層の可能性があり、慎重に精査したが遺物は出土しなかった。また、第6-3層上面でピット2基(Pit1・2)を検出した。Pit1は幅10cm、長さ20cm、深さ3cm、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトである。Pit2は幅36cm以上、長さ60cm以上で、深さ9cm、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトと第5-4層:明黄褐色(10YR6/6)シルトとのブロック土である。いずれも遺物は出土しなかった。なお、Pit1・2とも深さが浅いこと、検出面に起伏があり、埋土が第5-4層に近似することから、同層が旧地形の落ち込み部分に堆積したもので、遺構ではない可能性がある。

- 1 表土 (マサ土)
- 2-1 造成土
 - 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
 - マサ土、4-1、河川埋土を含む
- 4-2 旧水田床土
 - にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- 4-3 旧水田床土
 - オリーブ黄色 (2.5Y6/4) シルト
- 5-1 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- 5-2 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
 - 0.5 ~ 2 cm大の礫含む
- 6-1 地山
 - 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト
- 6-2 地山
 - 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 6-3 地山
 - 灰オリーブ (7.5Y6/2) シルト
- 6-4 地山
 - オリーブ黄色 (5Y6/3) シルト

- ア 旧水田暗渠埋土
 - 5-1 と 6-1 をブロック状に含む
- イ~ケ D調査区河川埋土
 - イ 5-1 に 0.5 ~ 1 cm大の礫を多く含む
 - ウ 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
 - エ 暗灰色 (N3/0) シルト
 - オ 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂
 - 0.5 ~ 3 cm大の礫を含む
 - カ オにエをブロック状に含む
 - キ 灰色 (7.5Y5/1) シルト
 - ク 灰色 (7.5Y4/1) シルト
 - 0.5 ~ 1 cm大の礫を含む
 - ケ 灰色 (7.5Y6/1) 礫
 - 0.5 ~ 3 cm大の礫主体
- コ E調査区SX1埋土
 - 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト
- ス F調査区Pit1・2、SX1埋土
 - 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- セ F調査区SX1埋土
 - 6-4 にシをブロック状に含む

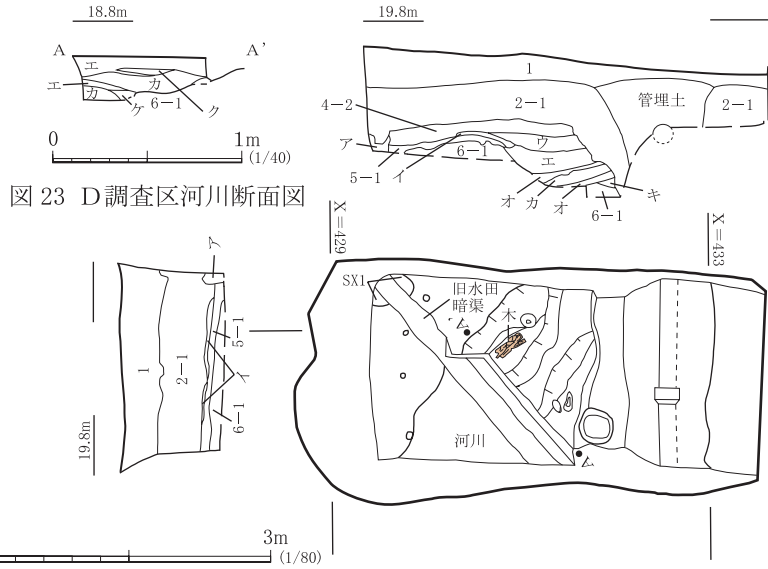


図 23 D調査区河川断面図

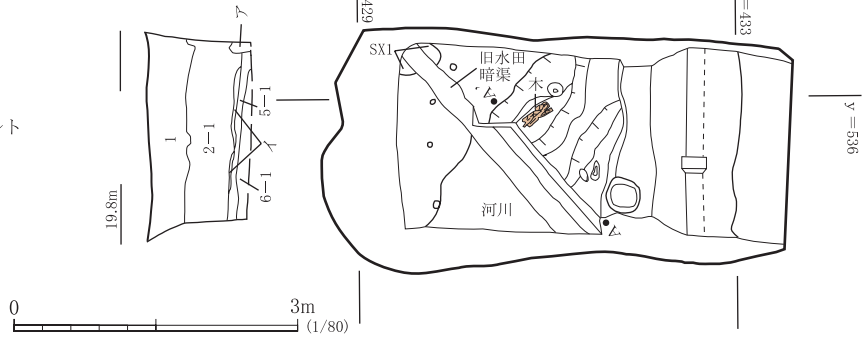


図 24 D調査区平面図・断面図

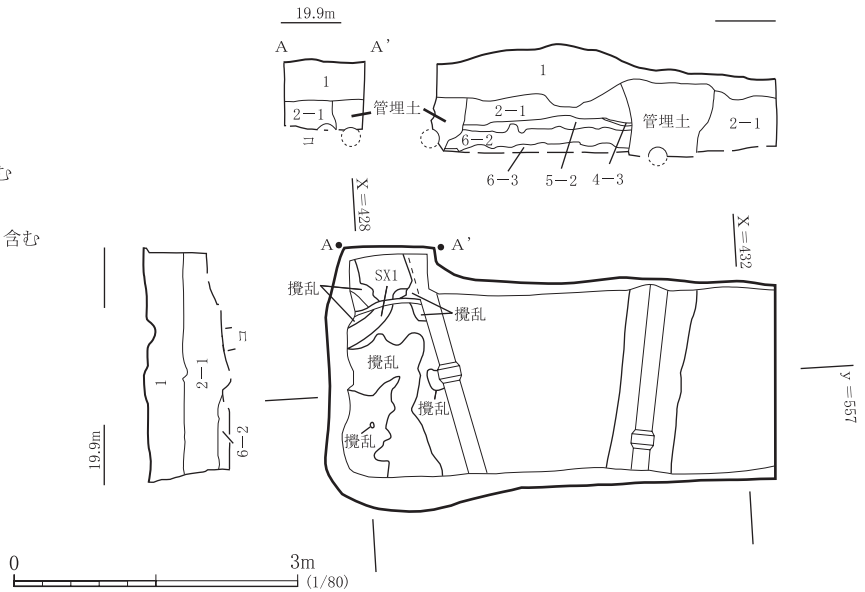


図 25 E調査区平面図・断面図

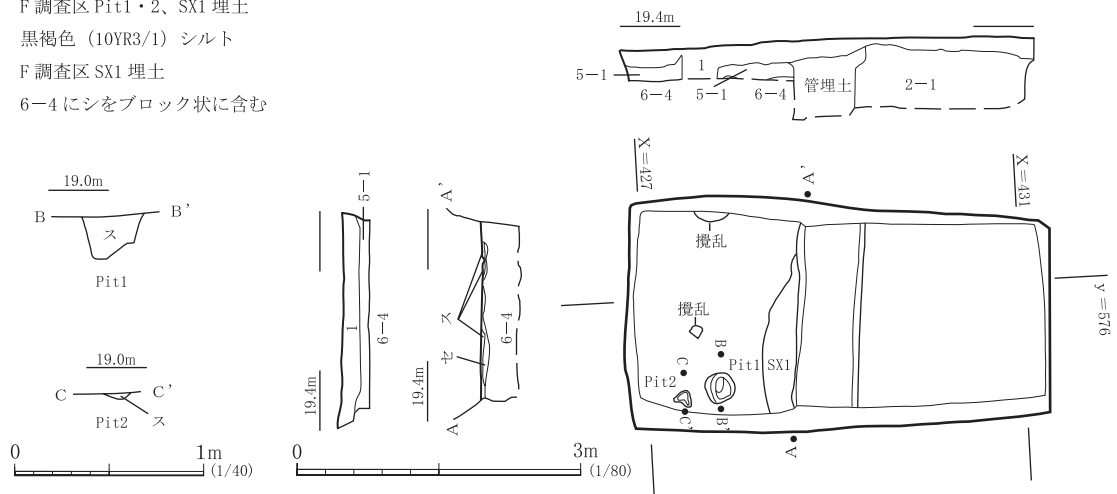


図 26 F調査区遺構断面図

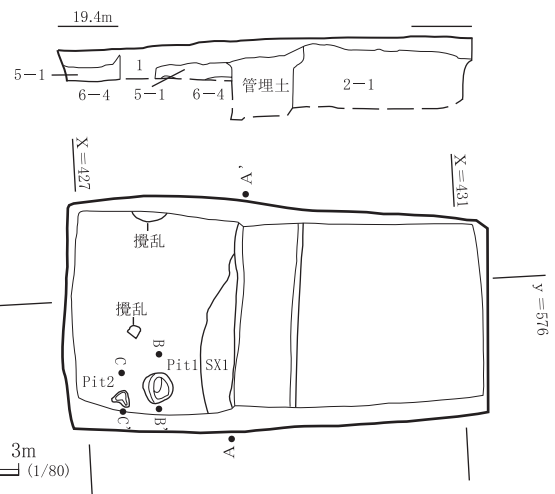


図 27 F調査区平面図・断面図

- 1 表土 (マサ土)
- 2-2 造成土 パラス
- 2-3 造成土 マサ土
- 2-4 造成土 砂
- 2-5 造成土 6-1に3-1、4-2を
ブロック状に含む
- 2-6 造成土
- 4-3、5-2、6-2のブロック土
- 2-7 造成土 4-3に青灰色 (5B6/1)
粘質土を少量含む
- 2-8 造成土 灰色 (7.5Y4/1) 土
パラス含む
- 2-9 造成土 灰色 (7.5Y4/1) 土
旧水田耕土主体
- 3-1 旧水田耕土
灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 4-1 旧水田床土
オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト
- 4-2 旧水田床土
灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
- 4-3 旧水田床土
浅黄色 (5Y7/4) シルト
- 5-1 灰色 (7.5Y5/1) シルト
- 5-2 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- 5-3 明黄褐色 (10YR6/6) シルト
- 5-4 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土と
5-3のブロック土
- 6-1 地山
明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土
- 6-2 地山
浅黄色 (2.5Y7/4) 粘質土
- 6-3 地山
明黄褐色 (10YR7/6) シルト

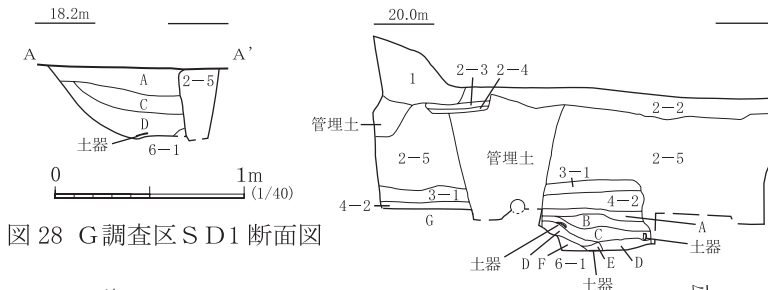


図 28 G調査区SD1断面図

- 遺構埋土
- A 暗灰色 (N3/0) 粗砂
同色シルトを含む
- B 灰色 (5Y5/1) 粗砂
0.5~1cm大の礫を含む
- C 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- D 灰色 (5Y5/1) 粗砂
0.5~3cm大の礫を含む
- E 灰色 (5Y5/1) シルト
- F Cと6-1のブロック土
- G 4-2に6-1をブロック状に含む
- H 淡黄色 (2.5Y8/4) 粘質土
- I 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土
- J HとIのブロック土
- K 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- L Iと5-3のブロック土

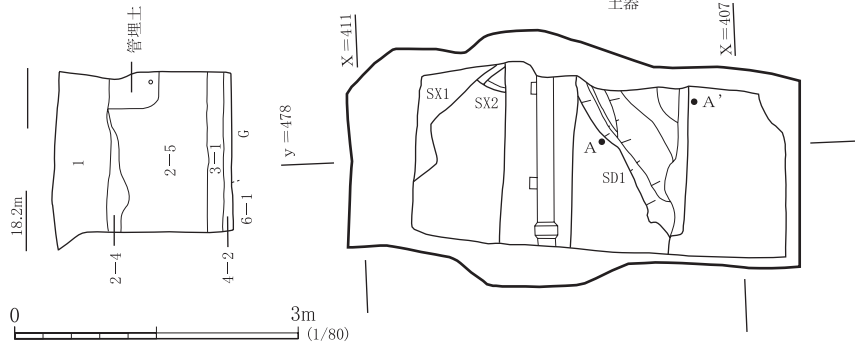


図 29 G調査区平面図・断面図

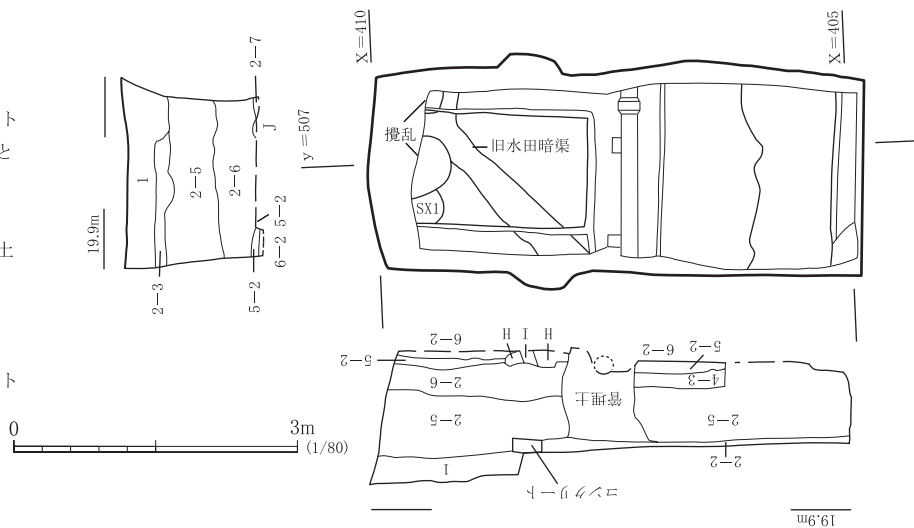


図 30 H調査区平面図・断面図

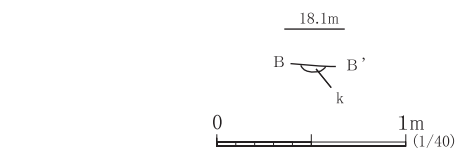


図 31 I調査区Pit1断面図

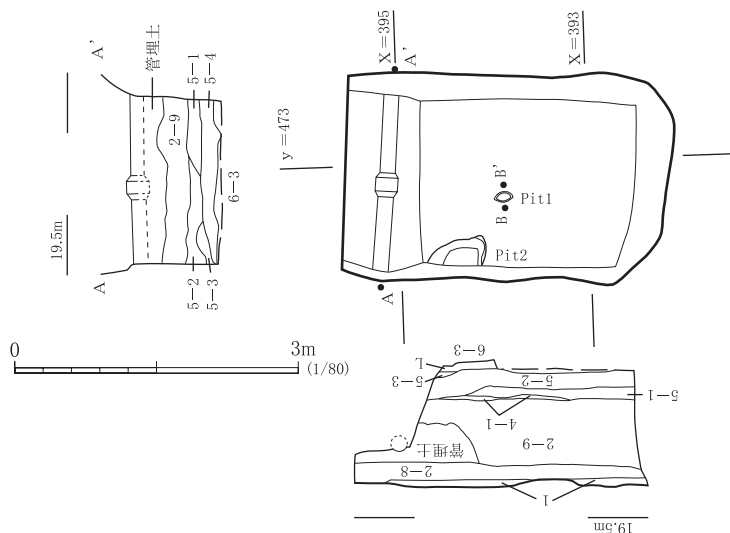


図 32 I調査区平面図・断面図

J調査区

調査区の大半が共同溝の設置に伴う掘削により攪乱されていた。層序は、層厚約60cmの第1・2層、層厚約10cmの第3-2層:暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト、層厚約8cmの第4-1層:オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト、層厚約8cmの第4-2層:灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト、層厚約24cmの第5-1層:灰色(7.5Y5/1)、層厚約20cmの第5-2層:黒褐色(10YR3/1)シルト、層厚35cm以上の第6-4層:にぶい黄色(2.5Y6/4)シルトの順である。この調査区の南西約30mの地点では、昭和62年度に教養部複合棟(現:メディア基盤センター)新営工事に伴う発掘調査で、黒褐色粘質土の遺物包含層^{註1}が検出されている。このことから第5-1・2層は遺物包含層の可能性が高いと考え、慎重に精査したが遺物は出土しなかった。

- 1 表土 (マサ土)
- 2-10 造成土 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 土
バラス等を含む
- 3-2 旧水田耕土 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト
- 4-1 旧水田床土 オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト
- 4-2 旧水田床土 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
- 5-1 灰色 (7.5Y5/1) シルト
- 5-2 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- 6-4 地山 にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト

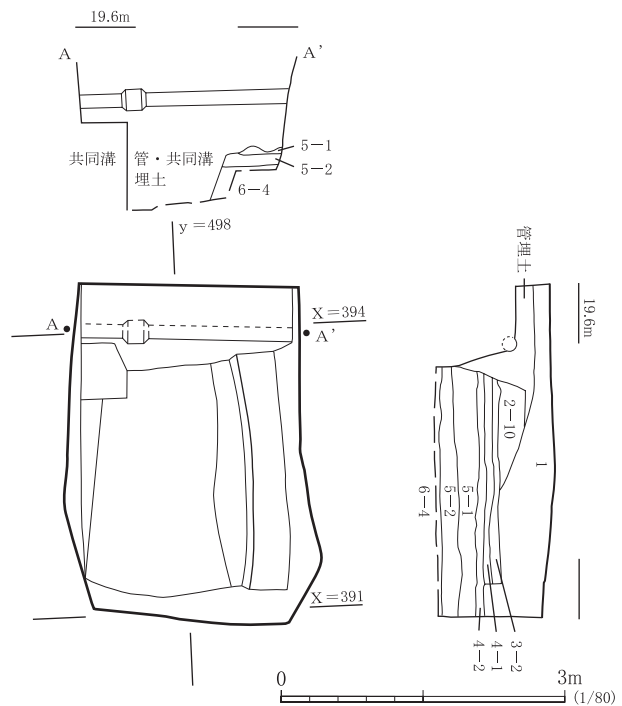


図 33 J調査区平面図・断面図



写真 29 A調査区南壁土層断面(北から)



写真 30 B調査区南壁土層断面(北から)



写真31 C調査区西壁土層断面(東から)



写真32 D調査区河川土師器出土状況(北から)



写真33 D調査区南壁・河川土層断面(北から)



写真34 D調査区西壁土層断面(東から)



写真35 E調査区西壁土層断面(東から)



写真36 F調査区全景(南から)



写真37 F調査区Pit1・2半裁状況(南から)



写真38 F調査区南壁・西壁土層断面(北東から)



写真39 G調査区S D1検出状況(北から)



写真40 G調査区S D1土層断面(南西から)



写真41 G調査区S D1弥生土器出土状況(西から)



写真42 G調査区S D1完掘状況(北から)



写真43 G調査区東壁土層断面(西から)



写真44 H調査区北部遺構検出状況(南から)



写真45 I調査区西壁土層断面(東から)



写真46 J調査区北壁・東壁土層断面(南西から)

(4) 遺物

今回の調査では、A～D調査区では河川、G調査区ではSD1から多数の遺物が出土した。出土遺物の総数は619点であるが、大半が図化不能の小片である。以下では図化できた代表的な遺物について述べる。

A調査区出土遺物

1～3、18は河川出土。1は土師器甕口縁部。2は土師器甕胴部。外面に横方向のタタキを施し、ススが付着する。3は土師器高坏脚部。18は打製石斧。頭部を欠損しており、正面・裏面中央部は素材面をそのまま残している。石質は結晶片岩である。

B調査区出土遺物

4、5は河川出土。4は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の甕。5は土師器甕で古墳時代中期に属する。口縁部は直線的に外反し、口唇部はヨコナデによりやや内傾する。外面にタテハケ、内面にナデを施す。口縁部の一部が歪んでおり、注口状を呈していた可能性があるが、欠損のため定かではない。6は白磁で玉縁の口縁部を持つ。第2層から出土。

C調査区出土遺物

7は弥生時代中期の壺口縁部で垂下部に山形文を施す。第2層出土であるが、本来は河川埋土に含まれていた可能性が高い。8は弥生土器の壺もしくは鉢底部。内外面にミガキを施す。河川出土。

D調査区出土遺物

河川から弥生土器・土師器片が多数出土した。9・11～17は河川出土。9は弥生時代前期の甕口縁部。口唇部に刻目、胴部に浅い段を持つ。10は古墳時代前～中期の土師器甕口縁部。河川を掘りこんだ管理土出土で、本来は河川埋土に含まれていた可能性が高い。口唇部をヨコナデによりつまみ上げ、胴部外面には右上がりのタタキが残る。11、12は古墳時代中期の土師器高坏坏部。11はヨコナデにより口縁部先端をわずかに外反させる。坏部中位に浅い段を持ち、坏部下半の脚部との接合面で欠損している。12は口縁部上半をヨコナデにより外反させ、坏部中位には浅い段を持つ。13～15は古墳時代前～中期の土師器高坏脚部。13は坏部との接合面で欠損している。外面にタテミガキを施し、下半に1個単位の円形透かし穴を3方向から施す。内面にはシボリ痕を残す。16は小型の土師器壺もしくは鉢底部。不安定な平底で外面は風化が激しく調整不明。内面はタテ、ヨコハケ後ナデを施す。17は須恵器坏蓋片。古墳時代後期前半～中頃に属するものと考えられる。

G調査区出土遺物

SD1から弥生時代中期後半の土器がまとまって出土した。19は広口壺の口縁部。口唇部をやや肥厚させてつまみあげる。外面にはナデを施す。内面は風化により調整不明。20は壺の頸部で1条の貼付突帯を施し、突帯上に布による刻目を持つ。内外面にはタテハケを施す。21、22は同一個体と考えられる壺の頸～胴部。器面の残存状況は極めて良好で、断面もほとんど風化していない。図示していないが、他にも接合しない同一個体片があり、調査区外にも同一個体片が存在する可能性が高い。21は頸部に1条の貼付突帯を施し、突帯上に布による刻目を持つ。外面はタテハケ後に右上がりのミガキ、内面にはナデを施す。22は胴部最大径の位置に2条1組の貼付突帯を施す。外面はタテハケ後左上がりのミガキ、内面にはナデを施す。23は甕口縁～胴部。口唇部をやや肥厚させてつまみあげる。外面にタテハケ、内面にナデを施す。24は甕底部。内外面とも風化が激しい。

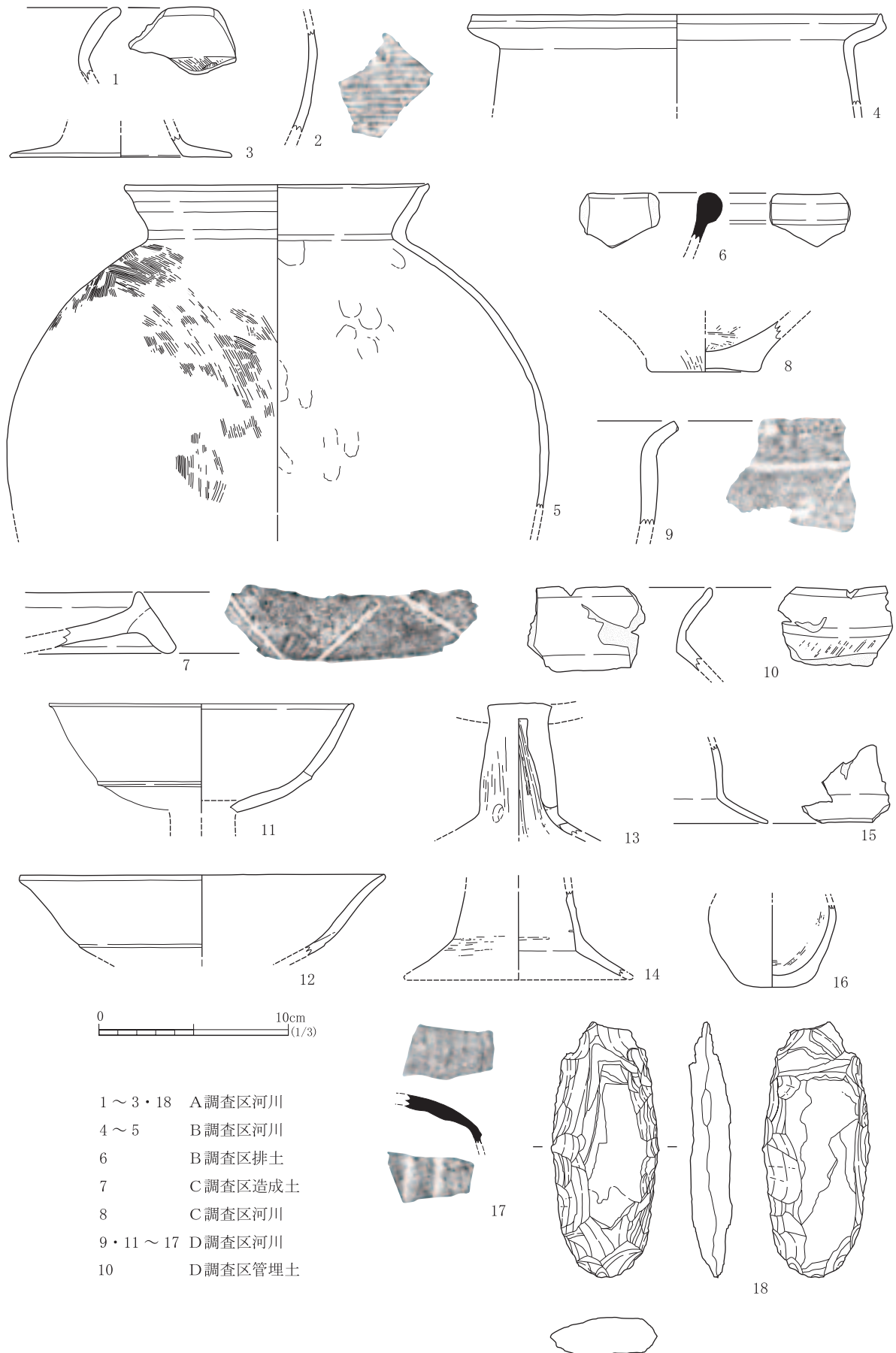


図 34 出土遺物実測図①

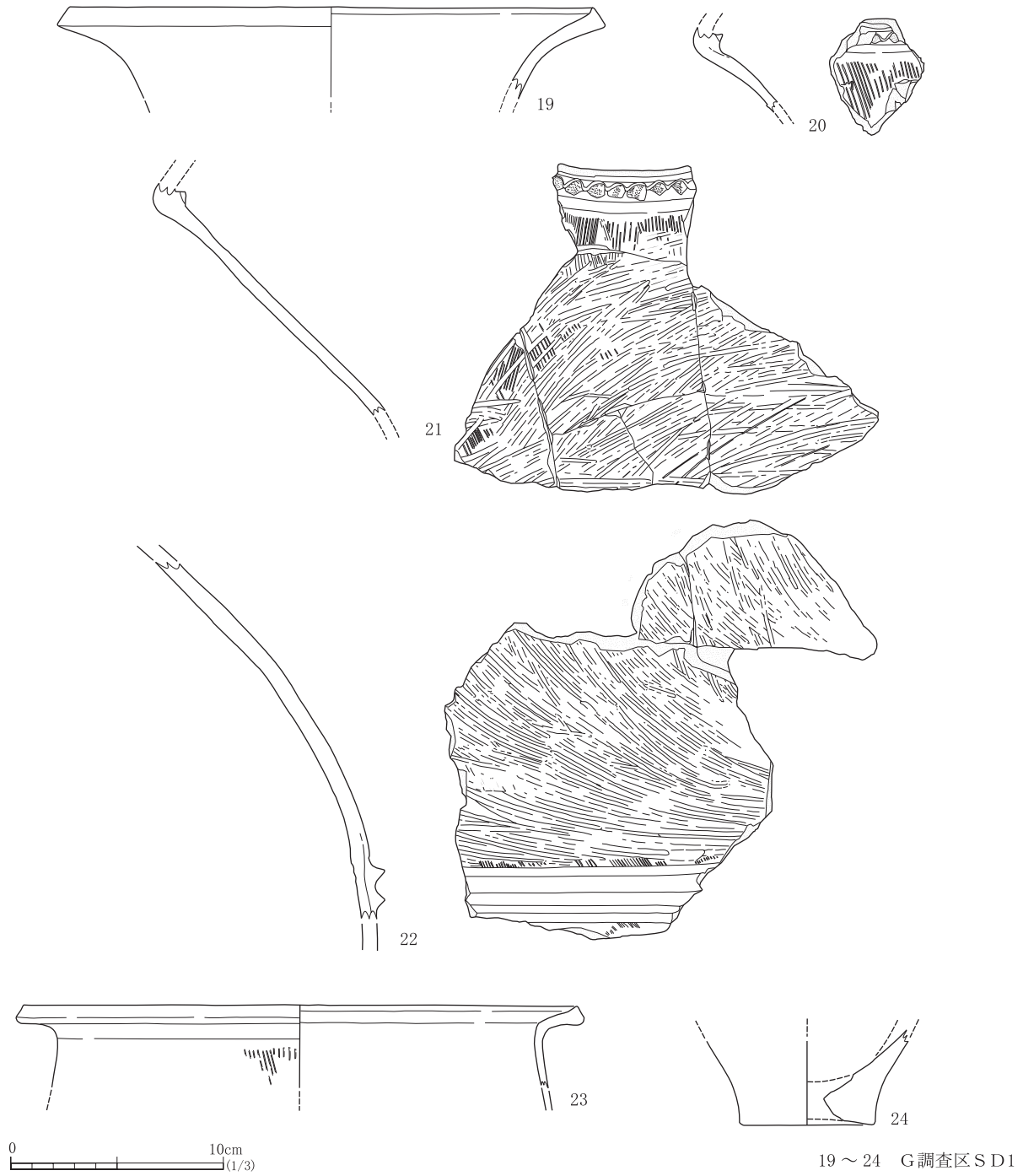


図 35 出土遺物実測図②

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 47 出土遺物①



17-1



17-2



18-1



18-2



20



23



24



21-1



21-2



22-1



22-2

写真 48 出土遺物②

表3 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
						①外面	②内面		
1	A	河川 f	土師器 甕	口縁部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
2	A	河川 f	土師器 甕	胴部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	外面 スス付着
3	A	河川 f	土師器 高坏	脚部	②(11.7)	①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)		0.1~1mmの砂粒を少 量含む	
4	B	河川 j	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	①(10.8)	①②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
5	B	河川 j	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①16.2	①②2.5Y7/2灰黄色		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	注口状を呈 する可能性
6	B	排土	磁器 碗	口縁部		素地 灰白色(5Y7/2) 釉 オリーブ黄色(5Y6/3)		精緻	
7	C	2	弥生土器 壺	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
8	C	河川	弥生土器 壺または鉢	底部	②(5.6)	①浅黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
9	D	河川	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部		暗黄灰色(2.5Y5/2) 黄褐色(2.5Y5/3)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
10	D	管 埋土	土師器 甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
11	D	河川	土師器 高坏	坏部	①16.1	①橙色(5YR7/6) ②にぶい橙色(5YR7/4)		0.1~1mmの砂粒を少 量含む	
12	D	河川	土師器 高坏	坏部	①(19.4)	①灰黄褐色(10YR4/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
13	D	河川	土師器 高坏	脚部		①②浅黄色(2.5Y7/4)		0.1~3mmの砂粒 を少量含む	
14	D	河川	土師器 高坏	脚部		①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
15	D	河川	土師器 高坏	脚部		①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)		0.1~3mmの砂粒を多 く含む	
16	D	河川	土師器 壺または鉢	胴部~ 底部	②3.5	①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(2.5Y8/2)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
17	D	河川	須恵器 坏蓋	天井部		①灰色(N5/0) ②灰色(N6/0)		0.1~1mmφの砂粒を 少量含む	
19	G	SD1	弥生土器 壺	口縁部	①(24.6)	①淡橙色(5YR8/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	
20	G	SD1	弥生土器 壺	頸部		①②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	
21	G	SD1	弥生土器 壺	頸部~ 胴部		①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	
22	G	SD1	弥生土器 壺	胴部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄色(2.5Y7/4)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	
23	G	SD1	弥生土器 甕	口縁~ 胴部	①(26.1)	①淡橙色(5YR8/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	
24	G	SD1	弥生土器 甕	底部	②(6.4)	①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)		0.1~3mmφの砂粒を 多く含む	

表4 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
18	A	河川 f	打製石斧	全長13.5 最大幅1.05 最大厚2.1	200.1	結晶 片岩	

(5) 小結

今回の予備発掘調査は、共通教育棟本館東側と共通教育講義棟西側周囲に合計10ヶ所の調査区を設けて実施した。共通教育本館東側ではA～D調査区で河川、E調査区で遺物包含層と落ち込み、F調査区でピットと落ち込みを検出した。

A～D調査区で検出された河川は、その位置関係から一連の河川と推測される。河床を検出したのはD調査区のみであるが、現地形から流路方向は東から西と考えられる。また、調査面積が狭小にもかかわらず、埋土からは多数の遺物が出土した。出土土器は弥生土器・古墳時代前～中期の土師器が主体で古代以降の遺物を含んでいないことから、古墳時代後期頃に埋没したと推測される。このほか、D調査区では自然木も出土したことから、未調査部分には木製品等も遺存している可能性がある。出土土器は風化したものが多いことから、調査区周辺及び弥生～古墳時代の集落が存在したと推測される調査区北側の丘陵部^{註2}から流れこんだものであろう。また、共通教育本館東側に隣接する総合図書館敷地^{註3}でも埋土に弥生土器、須恵器、磁器、瓦質土器を含む河川が検出されており、関連が注目される。

E・F調査区で検出された落ち込み、ピットは出土遺物がないため詳細は不明であるが、埋土の色調から古代以前の可能性が高い。特にF調査区では現地地表下わずか25cmで遺構面が検出されたため、調査区周辺では、今後の掘削工事にあたって埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要である。

共通教育講義棟西側ではG調査区で弥生時代中期後半の溝を検出した。吉田構内中心部における明確な弥生時代の遺構はこれが初めてである。ごく一部の検出であるため詳細は不明であるが、出土土器は器面の残存状況が極めて良好であり、周囲に集落が存在した可能性が高い。

H・I・J調査区ではH調査区で旧水田暗渠を検出した以外に明確な遺構を検出できなかった。また、遺物包含層の可能性のある土層を検出したが、遺物は皆無であった。上記の調査区周辺では、旧水田の造成及び統合移転時の造成により、遺構や遺物包含層が削平されている可能性も考えられるが、未調査地域が多いため今後も慎重な調査が必要である。

上記の調査結果を受けた埋蔵文化財資料館専門委員会の審議・判断に基づき、共通教育本館北側(A～C調査区)については、河川が検出されたものの攪乱が著しいことから、工事施工時に立会調査を実施し、本館南側(D～F調査区)については、遺構と遺物包含層が確認されたため、本発掘調査を実施することになった。また、共通教育講義棟北側(G・H調査区)については、掘削工事が概設の排水管を撤去し、同じ場所に排水管を新設する工事のみにとどまったことから、立会調査を実施することになった。共通教育講義棟南側(I・J調査区)では、遺物包含層の可能性のある土層を確認したものの、明確な遺構が検出されず遺物も皆無であったことから、工事掘削幅を極力狭くした上で立会調査を実施することになった。

[註]

- 1) 河村吉行(1988)「第3章 吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口
- 2) 森田孝一・河村吉行・杉原和恵(1986)「第3章 吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』, 山口
- 3) 河村吉行(1985)「第2章 中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口